
進む彼方

村山ツグト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進む彼方

【Zコード】

Z6293C

【作者名】

村山ツグト

【あらすじ】

教室の片隅にいる女の子。なぜかはわからないけど彼女が気に入る主人公。微笑ましいような悲しいような、そんな世界・・・

冷たい瞳が気になった。

誰にも気に入られることなく、自身も他人に興味のないようなその姿が気になった。

視線は常に一定の位置。陰った横顔は、感情がオフになつたかのように冷たい

彼女は毎日同じ場所にいた。

淋しそうだった。

だから僕は彼女の前に机を一つ置いた。

クラスの目は驚きの色に染まつっていた。

その色は、しだいに異物を見るものに変わつた。

彼女は氷のような瞳を向け、冷ややかな笑みを浮かべた。

しかし、その笑みは暖かい色をしていた。

「頭大丈夫？」

友人のカレンが僕の行動を中傷する。

「何もないところに机なんか置いて意味わからないよ。みんな言つてるよ？ミツヒコは『変人ミッチー』に昇格したって」

どうやら、彼女の姿は僕にしか見えていないみたいだった。

「意味はあるよ。淋しそうにしている友人を放つてはおけないからな」

視線を机の方へと向ける。その先にいる彼女へ向けてのアイコンタクト。例によつて冷たい視線が返つてくる。

「ほんと、意味わからないね。私も付き合い方考えた方が良いのかな？」

「好きに」

会話の終了はあつさりとしていた。

カレンはそれ以上何も言つことなく、自分の席へと足を運んだ。

カレンの考えは多分正しいのだ。けど、僕の行動も間違はない。

ただ、それを理解し合えていないことが少し悲しかった。

机の先の彼女に視線を向ける。こちらの視線に気がつくと、彼女もまた悲しそうな表情を向けた。

基本的に僕は人付き合いが苦手だ。人見知りもあるおかげで、会話をするということを少し億劫に感じてしまう。

しかし、カレンとは何故か出会った時から息が合つた。どうでもいいような話でも、その時間は楽しいものに変わる。彼女とのひと時は、まさに魔法がかかつたように楽しいものだった。

カレンとの関係は、これからもずっと楽しく流れしていくものだと思つていただけに、彼女からの緊迫した表情での呼び出しには戸惑つた。

屋上の扉を開けると、その娘はいた。

彼女の前に行く。緊迫の空気がどんどん重い。

「私、ミツヒコのことが好き。みんなは変人扱いするけど、私は全部ひつくるめてミツヒコが大好き。私と・・・付き合って下さい」突然の告白。額から汗が流れ落ちる。それは、夏の茹だるような暑さのせいではない。冷たい一粒だった。

「・・・ミツヒコは私のこと・・・嫌い？」

言葉が出ない。目の前には、瞳をうるわせさせながら赤面の表情を向けるカレンがいる。

ショートの明るい色の髪が、夕日に照らされ一層その色を鮮やかにしている。

カレンが嫌いかと聞かれれば、僕は首を横に振る。好きかと聞かれれば、首を縦に振るだろう。しかし、それが恋愛感情かと言われば、僕は答えることが出来ない。

それほど、僕とカレンとの距離は近いものなのだ。

僕が返事に困っていると、思つてもない方向から声が聞こえた。

「あなたは、その人が嫌いなの？」

初めて聞く声。清廉で落ち着きのある音。視線の先に冷ややかな

表情をした女の子の姿があつた。

「何を迷うの？　あなたの心は何を観てているの？」

僕の周囲の世界が止まる。彼女を中心とした一ときりの時間。

「その娘が・・・嫌い？」

「嫌いじゃない。けど、好きかは分からぬ。カレンは親友だ。何でも話せて、一緒にいて楽しい。いつまでも一緒にいたい、そう感じてる」

「なら」

「けど、恋愛感情かといわると・・・自分でも分からぬんだ」
彼女は静止しているカレンの肩に手をのせ、言葉を繋ぐ。

「この人の心は無垢で真っ直ぐ。純粹でちょっと慌てがちだけど、きつと君となら幸せになれると思つ」

冷たい言葉が腹に染みる。

「君も、きつと大丈夫だよ？」

「なんで、そんなこと言えるのさ？」

抱えていた心の錘が、ここに来て一層淒みを増す。彼女の一言一言が心に響く。

「僕は、カレンを幸せにできるほど立派な人間じゃない。何の取り柄もない、つまらない人間だ」

「私は、君の良いところを知ってるよ？君は自分で言つてるほど、情けなくなんかないよ」

彼女が僕の手を優しく包み込む。その手は冷たかったが、でも、暖かかった。

「私、君が机を私の前に置いてくれたときすこく嬉しかつた。初めて、私を知ってくれる人がいる。私の存在を理解してもらえた。本当に嬉しかつた。君は優しい心の人間。だから、ね？」

暖かい瞳に笑み。彼女は僕を優しく抱擁すると、霧となつて姿を消した。

耳元で囁かれる一言が、僕の心を軽くした。

世界が動く。カレンがこっちを見ている。

僕は息を吸い込みゅっくり口を開く。

「どうしたの？」

カレンが不思議そうな顔で僕を覗き見る。
僕が見た先は、さつきまでその人がいた所。
長い黒髪の冷たい瞳の暖かい女の子。
名前も知らない彼女は、最後に僕にこう告げた。

『ありがとう。お父さん』

「なんでもない」

僕は首を横に振り、彼女の手を握る。
カレンは少し顔を赤くした。

一歩ずつゆっくりと僕たちは前進する。

まだ観ぬ未来に向かって、世界はゆっくり動き始めた。

(後書き)

長編で書いたかった作品です。お気に召しますかどうか・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293c/>

進む彼方

2011年1月16日00時24分発行